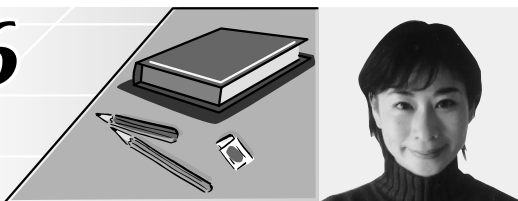


# 学生時代と図書館 66

— 図書館という国の住人 —

中山 智子



学生時代に利用した図書館の中で、一番印象に残っているのが、二度のフランス留学中に利用した図書館である。最初の留学は、大学院修士課程の一年目での語学留学だった。パリ大学付属の語学センターに一年間留学したが、「修士論文の資料を集める」という名目も渡仏前の留学目的に加えていたにもかかわらず、専門書を集めた図書館は、当時の私にはとても敷居が高く感じられた。語学センターの学生証で利用できる、5区のパンテオンの隣にあった大きな図書館は、中世にその歴史をさかのぼることができる図書館だそうで、パリ中の学生も利用する図書館だった。少しでもその雰囲気味わいたいと、(ろくに専門書を見ることもなかったけれど)パリの学生と同じように、ロビーの石造りの階段に座り、自動販売機のコーヒーを飲んでいたのである。

ひまさえあれば劇場に通って芝居を見ていた私がかつぱら利用したのは、学生寮の近くにあった区の図書館だった。次に見る予定の芝居の戯曲を読んで、見る前に少しでも「予習」しようと、子どもの絵本や流行の小説が並ぶアットホームな区民図書館に足しげく通っていた。

博士課程に進学してから、ナント大学で二度目の留学を経験した。博士論文の資料収集が、今回は名目でなく重要な課題になり、図書館とはいやがおうでも深いつきあいとなった。他の人もよく言うことだけれど、図書館にはなぜか、いつも同じ時間に同じ場所に座り、本を読んでいる人がいるものだ。大学の図書館に通ううち、私もそんな人から顔を覚えられたのか、ある日、街中の劇場で、「大学の図書館で顔を見かけたことがある」とフランス人の学生から声をかけられ、友達になったこともあった。

そのうち、研究資料収集のため、パリのフランス国立図書館も頻繁に利用するようになった。1996年に開館した近代的な建築の巨大な新図書館では、研究者用の閲覧室は地下に設置されていて、メタリックな内装の中をエスカレーターで降りていく時には、いつもSF映画のセットの中にいる気分がした。ひとたび閲覧室に入ると、木製の書架が並び、ほっとした気分になった。

図書館で本をひたすら調べる日々は孤独なものだ。だが、パリに長く留学し、国立図書館を毎日のように利用していた友人は、「この図書館に来ると、クリスマスの休暇中でも、一人じゃないと感じる。いつも誰かがいて、私と同じように本を探したり、読書しているから」と言っていた。確かに、図書館に行けば、自分と同じように机に向かい、本のページをめくっている人がいる。街がクリスマスの喧騒であふれていても、道行く人の歩みがどんなに早くても、図書館の雰囲気は変わらないものだ。いつも同じ静けさがあり、心地よさの中にも、独特の緊張感が漂う。そんな雰囲気に一旦なじんでしまえば、どこの国であれ、自分の居場所を見つけられるのかも知れない。

図書館の規模や性質で多少の違いはあっても、本を探し、読み、借りるという営みはどの国でも変わらない。図書館は、実際の国を超えて、一つの固有の世界を作っているのかも知れない。そこに居場所を見つける人は「図書館という国」の住人なのだ。

今Gaidai Bibliothecaを手に取り、この文章を読んでいる学生のあなたは、きっとそんな図書館の住人の一人だろう。想像してみてほしい。それが来年なのか、三年後か、あるいは十年後なのかは分からないけれど、人生のある時、海外のある国で図書館に足を踏み入れることがあるだろう。そのとききっと、見慣れない文字が並び書架を前にしても、静寂と心地よい緊張感が漂う図書館の中で、自分が図書館という国の住人の一人であることを再確認するだろう。

なかやま ともこ (講師・フランス演劇)